

## このファイルについて

本稿は『WEB2.0の未来 ザ・シェアリングエコノミー』（伊藤穰一+デジタルガレージグループ 編著、インプレスR&D発行）に掲載している記事の本文テキストをクリエイティブ・コモンズ・ライセンスで配布するものです。



この作品はクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの下で公開しています

# ビジネスとしての オープンソース・モデルの 未来とポテンシャル

## ミッチェル・ベーカー

Mozilla Corporation CEO

今や、マイクロソフトの独占状態だったブラウザの牙城を崩し、急激な勢いでシェアを伸ばしつつあるFirefox。そのFirefox や、メールソフトThunderbirdを世に送り出した立役者として知られているのが、ミッチェル・ベーカー氏。「トカゲ世話役主任」(Chief Lizard Wrangler) の異名をもつ彼女が展開してきた“オープンソース戦略”とは？

ウェブの未来は素晴らしいものであることは間違いないが、その一方で、多くの問題をはらんでいるのも事実だ。インターネットに登場するさまざまなトレンドや問題に対し、Mozillaというオープンソースのプロジェクトを提供する立場として、我々はどうのように対処していくべきなのか？ またオープンソースならではの解決法が、そこには存在するのか？ それについて、私なりの考えを述べておきたい。

### セキュリティに関しても オープンモデルのほうが優れている

そもそもオープンソースとは、ここ4～5年の間に広がった考え方だが、ソフトウェアの共有というこれまでのビジネスモデルとは、抜本的に異なったアイデアをベースにしている。

オープンソースの代表例としてLinux (UNIXベースのOS) が挙げられると思うが、Linuxはすでに多くのインフラで

使用され、デスクトップにも広がりを見せている。世界中のボランティアのプログラマーによって開発されたフリーのウェブサーバーである「Apache」(アパッチ) は、いまや50パーセント以上のウェブコンテンツ送信に利用されている。また、全世界の約6000万人が、MozillaやFirefoxといったフリーのウェブブラウザを利用している計算になる。

オープンソースのソフトはさまざまな分野で成功しており、一般ユーザーのみならずビジネスの領域にも進出している。

たとえば、あるデータセンターでは、独自仕様のシステムを利用して何百万というトランザクションを処理していたのだが、サーバー障害が発生したことを契機にオープンソースの導入に踏み切ったという。従来のシステムでも機能的な問題はなかったのだが、オープンソースならではのソリューションが、より簡単に、よりシンプルにできるからだ。

RedHat：Linux製品の配布・販売・サポートを手がける業界最大の企業。1993年設立。

Novell：ネットワークOS「NetWare」で市場を牽引するトップ企業。1981年設立。

Mozilla：現在、Mozillaは、フリーソフトやオープンソースプロジェクトの名称など多様な意味で使われているが、ここでは旧ネットスケープコミュニケーションズのブラウザから発展したオープンソースのブラウザの名称として使われている。

フィッシングサイト：有名サイトや銀行サイトになりすまし、個人情報盗み取ろうとするサイト。

Mozilla Foundation：Mozilla FoundationはFirefoxの開発や普及を推し進める財団で、その下部組織として営利目的の企業活動を行うのがMozilla Corporation。

また、これまでのオープンソース・プロジェクトでは、どのように資金を得てソフトウェアを作り続けていくべきか、という問題があった。Red Hat\*やNovell\*のようにオープンソースで収入を得る方法を確立した企業も数多く登場しており、我々もMozillaプロジェクトにおいて検索サイトとの提携を進めている。

もちろん、オープンソースのツールは決して完璧なものではない。そのいくつかある課題の中でも、特に問題となっているのがセキュリティに関するものだ。現に、我々が提供するオープンソースなブラウザFirefoxにしても、常にセキュリティ面の攻撃にさらされている。それゆえ、「オープン」なモデルと「クローズド」なモデルのどちらが有利なのかが、つねに議論の対象となってきた。

しかし、結論からいえば、セキュリティ対策に関しても、オープンモデルにアドバンテージがあるというのが私の意見だ。クローズドモデルの場合、アプリケーションの内部で何が行われているのか、はっきり見ることができないため、外側から推測するほかない。仮にセキュリティ上の脆弱性が見つかったとしても、マイクロソフトが公開した情報の範囲でしか、我々は実態を知ることができないのだ。一方、我々のようなオープンモデルの場合はどうか？

Firefoxの基礎となったブラウザMozilla\*では、オープンモデルを採用することで多くの人にプロジェクトへ参加してもらうことができる。それゆえ、問題の発見も容易になっている。今後、さらにプロジェクトへ自発的に参加する人が増え、彼らがセキュリティに対する関心を持っていれば、わざわざセキュリティの専門家へ頼る必要もなくなるというわけだ。

たとえば、最新のFirefox2では「アンチフィッシング機能」が加えられているが、これはユーザーがフィッシングサイト\*の存在をMozilla Foundation\* (Fire-

foxの開発元) に通知するしくみになっている。つまりユーザーの協力によって、フィッシングサイトをリストアップしていくという機能になっているのだ。インターネットはますます複雑化する傾向にあるが、このようにユーザーにアプリケーションの機能の一部を担ってもらうという考え方は、オープンモデルならではの発想だ。

では次に、「バンドル」の問題について考えてみよう。

バンドルと、はテクノラティのタンテック・セリックが述べているように、ウェブでやり取りされるファイルフォーマットと、特定のアプリケーションを結びつけるというシステムのことだ。バンドルという考え方自体が、古いパラダイムの一部ともいえるが、マイクロソフトはいまだに、オープンソースより、統合されたアプリケーションのほうが効率がよいと主張している。

### 8割以上のユーザーが要望しなければ新たな機能拡張はしない

もちろん、彼らの主張にも理由がないわけではない。オープンソースのアプリケーションが、その進化の過程において、競合する「クローズドな」アプリケーションに劣るということは珍しくない。とはいえ、少しずつ修正を加えられていく過程で、最終的にオープンなアプリケーションが勝利することになる、というのが私の信念だ。オープンなアプリケーションが一定のシェアを獲得すれば、すべてのファイルフォーマットはバンドルから解放されることになるだろう。

もちろん、オープンソースなプロジェクトにおいては、アプリケーションに新しい機能を実装していくことはけっして容易ではない。MozillaのようにMacintoshやUNIXを含む横断的なプラットフォームで利用できるということは、あらゆる

層のユーザーから、それぞれピクセル単位での修正を求めるような、膨大な要望を突きつけられるということだ。

そこでFirefoxの「エクステンション」(あとから追加できるプログラムモジュールのこと)においては、80パーセント以上のユーザーが要望しなければ新たな拡張機能を実装しないというルールを決めている。Firefoxは、けっして専門家向けの究極のツールなどではなく、人々が最も必要としている機能を改善することが最優先だからだ。

### 堅牢性と利便性は トレードオフの関係にある

インターネットには常に不完全性がついてまわるし、Firefoxにも同じことがいえる。重要なのはインターネットの情勢に合わせた進化なのだが、シンプルであることを優先することで、逆に「クリエイティビティが失われるではないか」という懸念がないではない。

また、アプリケーションの堅牢性と利便性は常にトレードオフの関係にある。たとえば、セキュリティを高める方法はいくらでもあるが、現実にはそれを実装したら誰も使えないほど複雑なものになってしまうだろう。ActiveX(ウェブサーバーからプログラムをダウンロードして実行する技術)はセキュリティの面で頭痛の種だが、ここまで普及したのは利便性に優れていたからだ。利便性を取るのかりスクを取るのか、これは究極の選択でもある。もちろん、これら厄介な問題をユーザーによる自然な進化に任せられるという点がオープンソースの利点でもあるのだが。

Mozilla財団が目指しているのは急激な進化ではなく、旧来からあるものを活用していくという姿勢だ。

かつてMozillaプロジェクトでも、HTML以外のまったく新しいマークア

ップ言語を採用するという意見が出たことがある。だがインターネットの95パーセントを占める、何十億ページものHTMLで書かれたコンテンツを無視してはいけないのだ。たとえ5パーセントの新たなシェアを獲得できるチャンスがあったとしても、既存のコンテンツとの整合性を図っていくことがMozillaの使命だと考えている。